

やま・かわ・うみの 知をつなぐ

東北における在来知と環境教育の現在

羽生淳子・佐々木剛・福永真弓編著

東海大学出版部

やま・かわ・うみの知をつなぐ

東北における在来知と
環境教育の現在

羽生淳子・佐々木剛・
福永真弓編著



東海大学出版部



9784486021728



1923039027000

ISBN978-4-486-02172-8

C3039 ¥2700E

定価 (本体 2700円+税)

やま・かわ・うみの 知をつなぐ

東北における在来知と環境教育の現在

羽生淳子・佐々木剛・福永真弓 編著

本書は公益財団法人日本生命財団の助成を得て刊行された。

Weaving the Knowledge of Mountains, Rivers and the Ocean: Traditional Ecological Knowledge and Ecoliteracy in Tohoku, Northern Japan

Edited by Junko HABU, Tsuyoshi SASAKI and Mayumi FUKUNAGA
Tohoku University Press, 2018
Printed in Japan
ISBN 978-4-486-02172-8



口絵1 閉伊川中流で川流れを体験する子供たち（岩手県宮古市箱石、2016年7月30日）

山下祐介 (2012) 『限界集落の真実—過疎の村は消えるか?』筑摩書房。
 Berkes, Fikret (1993) Traditional ecological knowledge in perspective. In *Traditional Ecological Knowledge: Concepts and Cases*, edited by Julian T. Inglis, pp. 1-9. International Program on Traditional Ecological Knowledge, Ottawa, and International Development Research Centre, Ottawa.

目次

はじめに

羽生 淳子・佐々木 剛・福永 真弓 ix

1. 「ヤマ・カワ・ウミに生きる知恵と工夫」プロジェクトの
成り立ちとその概要 ix
2. 研究対象地域 x
3. 研究地域別の活動と本書の構成 xi
4. まとめ xiii

第1部 理論的・方法的視点

第1章 在来知・科学知とレジリエンス

羽生 淳子 3

1. 豊作があれば不作もある—不作・凶作に備える準備— 3
2. 在来知—西洋科学とは異なる世界観— 4
3. レジリエンスの理論からみたシステムの時空間的变化 6
4. 歴史生態学からみた在来知
—環境と人間の相互作用からみた文化景観の長期的持続性と物質文化— 9
5. おわりに 11

第2章 在来知ネットワークからとらえられる未来

福永 真弓 13

1. 在来知はなぜ重要なのか 13
2. 在来知とは何か—重なる世界を生かす方法 16
3. ネットワークの中の在来知—遊びと遊び仕事から 20
4. 「在来」であることを獲得するための仕掛けづくりへ 29

第3章 在来知と環境教育

佐々木 剛 33

1. はじめに 33
2. 環境教育のこれまでの経緯と現状 34
 - 2.1 人間環境宣言における「環境問題の教育」 34
 - 2.2 ベオグラード憲章 35

2.3	トビロシ宣言	36
2.4	世界環境保全戦略とブルントラント委員会最終報告	37
2.5	国連環境開発会議におけるリオ宣言とアジェンダ21	37
2.6	テサロニキ宣言	38
2.7	第二次環境基本計画	39
2.8	「持続可能な開発のための教育 (ESD) の10年」	39
2.9	「持続可能な開発目標 (SDGs)」	40
3.	環境教育の方向性	42
4.	在来知を取り入れた環境教育の意義	46
第2部 閉伊川流域のやま・かわ・うみにおける在来知と新しい試み		
第4章 須賀の絵解き地図を描く		
— 風景の「上書き」を超えて —		
1.	環境の潜在可能性を維持し、豊穣化させる必要性	51
2.	環境の「上書き」のダイナミズムから捉える価値の生成・構造化のダイナミズム	54
3.	五感が記憶する風景から環境の「上書き」のダイナミズムをおこす	56
3.1	須賀の風景の聴き取りを支える材料を作る	56
3.2	五感から風景をおこす	57
3.3	絵解き地図が示す複数の風景—環境の「上書き」のダイナミズム	61
4.	環境の潜在可能性を育むために	63
福永 真弓 51		

第5章 川のサクラマスがつなぐ山と海

— 子供たちと一緒に考える科学知と在来知 —

1.	なぜ、川のサクラマスか	67
1.1	「森川海のつながり」を基調とした内発的発展のための地域づくり教育の可能性	67
1.2	東日本大震災後の内発的復興のために	68
1.3	「環境教育プログラム」の開発会議	68
1.4	プログラム決定の会議プロセス	70
1.5	サクラマスサミットの開催	71
2.	水圏環境教育プログラムとは？	72
2.1	水圏環境リテラシー基本原則	72
2.2	水圏環境教育の目標とは？	72
2.3	ラーニング・サイクル理論と水圏環境教育	73
2.4	自己決定理論	74
佐々木 剛 67		

3.	川のサクラマスの生活史	75
3.1	サクラマスの生活史	75
3.2	サクラマスの研究手法	75
3.3	明らかになってきた古のサクラマスの生態	76
4.	閉伊川流域の生きる知恵「在来知」	78
4.1	インタビューに見る「森川海のつながり」と人とのつながり	79
4.2	思い出と願いや想いとの関係	86
4.3	教材開発の方向性	87
5.	閉伊川サクラマス MANABI プロジェクトの開発	88
6.	「サクラマス MANABI プロジェクト」がもたらす認識の変容	90
6.1	児童生徒の認識の変容	90
6.2	流域住民の認識の変容	94
7.	考察と展望—森川海の地域づくり教育による内発的復興の可能性—	96
真貝 理香・羽生 淳子 99		

第6章 主食の多様性、在来知とレジリエンス

— 歴史生態学からみた北上山地旧川井村地区の文化景観 —

1.	はじめに	99
2.	調査地域の概要と先行研究	101
2.1	調査地域の概要	101
2.2	先行研究	102
3.	聞き取りから考えるヤマの暮らしとその変化	103
3.1	聞き取り調査の対象とその概要	103
	◇コラム1◇	
	在来知を次世代に伝える 佐々木富治さん・アキさん (農業)	107
3.2	周年サイクル	108
3.3	穀類	109
3.4	豆類	113
3.5	シタミ (シダミ・ドングリ)・トチ・クリ	114
3.6	クルミ	116
3.7	ジャガイモ	116
3.8	山菜・キノコ・果実	117
3.9	焼畑	119
3.10	林業・畜産・養蚕・葉タバコ栽培	122
3.11	凶作と災害への対応	126
4.	産地直売所・地域ネットワークと新しい試み	128
4.1	やまびこ産直館	128

- ◇コラム 2 ◇
食で地域と人をつなぐ 神楽栄子さん (やまびこ産直館・組合長) 129
- 4.2 雑穀ブーム—何をやるか—適地適作・在来知を活かす 131
- ◇コラム 3 ◇
よみがえる雑穀栽培の「在来知」 嵯峨均さん・良子さん (嵯峨農園・かわい雑穀産直生産組合長) 132
- 5. 山は宝だ—環境教育における在来知— 135
- 6. 考察と展望—在来知から見たレジリエンスの重層性と景観保持の重要性— 137

第7章 ヤマを生かす焼畑

- 生態学からみた土と森—
- 1. 焼畑がヤマを壊す時—マダガスカル事例 142
 - 1.1 焼畑民の村 143
 - 1.2 常畑のリスク 145
- 2. 焼畑土壌の生態系観測—奥出雲での研究 146
- 3. 閉伊川上流小国の土地利用と土壌 150
- 4. 焼畑の持続可能性を考える 154

第3部 比較研究

第8章 核被災と社会のレジリエンス

—福島県内における小規模経済の新しい試み—

- 後藤 康夫・後藤 宣代・羽生 淳子 163
- 1. 調査の目的と概要 163
- 2. 福島県農民運動連合会メンバーのさまざまな活動 164
 - 2.1 県農民連の活動と再生エネルギーへの転換
—福島市(中通り地域)・佐々木健洋さん(県農民連事務局長) 165
 - 2.2 風評ではなく実害を明言し、トータルな視点から福島農業の将来を考える
—二本松市(中通り地域)・根本敬さん(県農民連会長) 167
 - 2.3 福島のおコメは安全ですが、食べてくれなくて結構です—南相馬市・相馬市(浜通り地域)・三浦広志さん(NPO野馬土代表理事) 169
 - 2.4 小規模ミルクラブラントの持続可能性と「ささき牧場カフェ」—福島市(中通り地域)・佐々木植三・智子さん夫妻・国府田純さん 171
 - 2.5 考察 174
- 3. 再生エネルギーの地産地消活動—21世紀型経済社会の始まり— 175
 - 3.1 「いのちと生活」の危機と立ち上がった社会運動 175

- ◇コラム 4 ◇
大友良英さん (ミュージシャン、プロジェクト FUKUSHIMA! 共同代表) からの聞き書き 176
- 3.2 再生エネルギー—地産地消活動の代表的な事業体とその特徴 177
- 3.3 典型としての会津電力、その理念と活動 178
- ◇コラム 5 ◇
佐藤彌右衛門さん (大和川酒造 9 代目当主、会津電力社長) からの聞き書き 179

- 3.4 考察—安藤昌益と田中正造から21世紀型経済社会へ— 180
- 4. 在来知と科学知の結合—レジリエンスの担い手としての女性— 181
 - 4.1 環境、災害における女性の視点—世界と日本— 181
 - 4.2 女性の地位と福島 181
 - 4.3 女性たちのレジリエンス活動 182
 - 4.4 福島と世界をつなぐ 184
- ◇コラム 6 ◇
鈴木二三子さん (一般財団法人 国際女性教育振興会福島支部長、有限会社 グリーントップ工業代表) からの聞き書き 184
- 4.5 考察—女性の地域づくり参加への重要性— 185
- 5. 展望—在来知と多様性、ネットワークの重要性— 185

第9章 生業の多様性と漆

—歴史生態学からみた二戸市浄法寺地区の漆産業—

- 伊藤 由美子・羽生 淳子 189
- 1. はじめに 189
- 2. 文献史料による歴史的背景 189
 - 2.1 浄法寺地区の地理的環境 189
 - 2.2 近世 191
 - 2.3 近代から現代 192
- 3. 聞き取りによる戦後の産業の変遷と漆 193
 - 3.1 吉田信一さんからの聞き取り—漆と生業の歴史的な移り変わり— 193
 - 3.2 大森清太郎さんからの聞き取り—漆掻きの変遷と在来知— 194
 - 3.3 聞き取り成果からみた漆掻きと生業の多様性 196
 - 3.4 産地直売所にみる昭和30年以降の農・林業の変遷 197
 - 3.5 小野知子さんからの聞き取り 197
- 4. まとめ 198
 - 4.1 生業の変遷 198
 - 4.2 生業の多様性の中の漆 199
 - 4.3 漆掻きにみる在来知とレジリエンス 200

第10章 食の多様性・ストック・共助の重層的レジリエンス

岡 恵介 203

—北上山地山村における危機への対応事例から—

1. 北上山地山村の自給的な食生活と木の実 203
2. 森や畑が恵む保存食料 204
3. 危機に備える保存のための在来知の展開 209
 - 3.1 ストッカーの普及 209
 - 3.2 ストッカー利用の実態 211
4. 北上山地山村における危機への備えと対応 214
 - 4.1 平成23(2011)年豪雪による停電と一部集落の孤立 214
 - 4.2 ストッカーの貢献とサブ・ライフレインの存在感 215
 - 4.3 平成28(2016)年の台風による停電と集落の孤立 217
 - 4.4 孤立集落へ 218
5. ストックの持つ意味と重層的なレジリエンス 222
 - 5.1 多様な農山村におけるストックの持つ意味 222
 - 5.2 食の多様性・ストック・共助の重層的なレジリエンス 225

第4部 コメントと展望

第11章 NPO 活動における海との共生と在来知

橋本 久夫 231

1. はじめに 231
2. 失われてゆく砂浜と漁労文化 231
 - ◇コラム7◇
津波復興余話—未来へ伝え残すために 震災遺構「たろう観光ホテル」 233
3. 自然体験活動の重要性 234
 - ◇コラム8◇
海の供養塔にみる津波碑の教訓 236
4. 復興における文化化を目指して 237
 - ◇コラム9◇
津波碑が伝えるもの 238
5. おわりに 239

第12章 地元民からみる、サクラマスを通しての学びの可能性

水木 高志 241

—地元を経験と学識をつなぐ—

1. はじめに—閉伊川大学校ではじめた体験学習の試み— 241
2. マインドフルネスでみつめる共通のスタート地点 242

3. サクラマスをめぐる体験学習の年間サイクル 243

4. 地元市民と研究者の協働作業 245

5. 在来知から見たサクラマス—生涯サイクルの多様性— 246

6. おわりに—在来知・科学知とひとのつながり— 247

第13章 在来知のちから

小山 修三 249

1. 在来知と科学知 249
2. 日本の主食の歴史 249
3. 焼畑という農業 251
4. 飛騨山地の焼畑ムラ 252
5. 川井村のインタビュアーから見えるもの 253
6. これからの課題と人類学者の役割 254

第14章 「わかる」と「できる」をつなぐプロジェクト

杉山 祐子 257

—在来知をともにつくる試み—

1. 「生きる場」に生まれる知 257
2. 在来知の科学性 258
3. 「見ればわかる」ことと、対象を「意思あるもの」として扱うこと 260
4. 在来知と環境への現代的働きかけ 261
5. 環境の変化・担い手の変化と在来知の共創にむけた試み 262

第15章 総括

羽生 淳子・佐々木 剛・福永 真弓 265

あとがき

羽生 淳子・佐々木 剛・福永 真弓 271

索引

275



口絵2 佐々木アキさんのおもてなし（岩手県宮古市川内，2016年6月28日，稲野彩子撮影）



口絵3 福島県北農民連第一発電所（上），福島りょうぜん市民共同発電所（下）（2014年10月25日，福島県伊達市霊山，2014年10月25日，羽生淳子撮影）

1. 「ヤマ・カワ・ウミに生きる知恵と工夫」プロジェクトの成り立ちとその概要

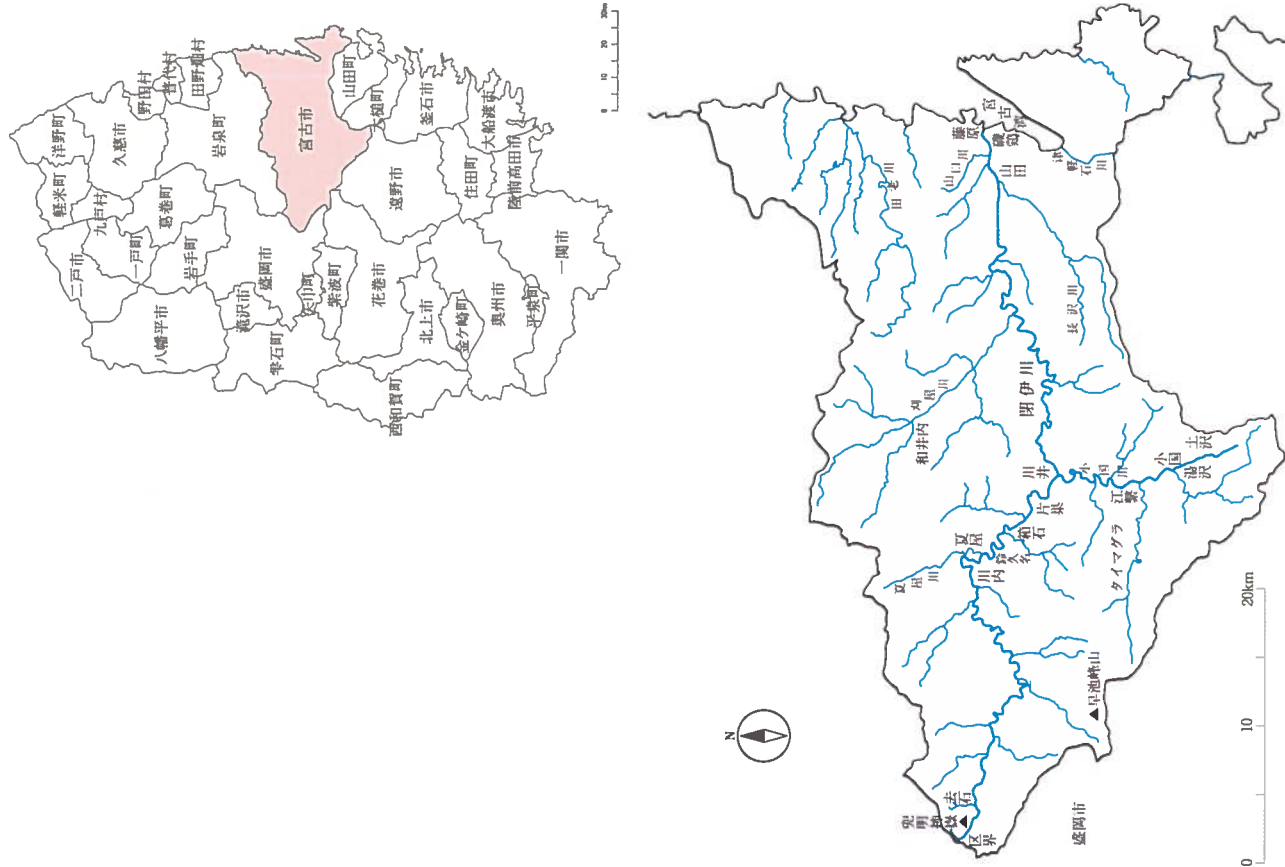
私たちは、2014年10月から2年間にわたり、「ヤマ・カワ・ウミに生きる知恵と工夫―岩手県閉伊川流域における在来知を活用した環境教育の実践」と題した研究プロジェクトを行った。本書では、プロジェクトの成果を報告するとともに、プロジェクトとその成果報告会を通じて知り合った方々からの寄稿も所収した。

このプロジェクトは、公益財団法人日本生命財団（以下、ニッセイ財団）から、2014・2015年度の学際的総合研究助成を受けた。学際的とは、いろいろな研究分野の人が参加するという意味だ。今回のプロジェクトのメンバーには、人類学、社会学、経済学、生態学など、さまざまな分野の研究者とともに、地元のNPOや任意団体の方々も加わった。

ニッセイ財団からの研究助成の募集課題は「人間活動と環境保全との調和に関する研究」で、2014年度のテーマは「環境保全・再生における都市と農山村の役割」、「流域を中心とする環境保全・再生」、「自然災害と環境保全」だった。これらのテーマには、人間と環境との関係を考える上で重要なキーワードとなる環境の保全と再生はもちろん、これらの問題を都市と農山村との関係から考察する視点と、環境問題を自然災害との関わりから考える視点が含まれている。

環境保全の問題を考えると、川の流域という地理的な単位を分析対象とするのは理に適っている。というのは、沿岸地域の生態系は、そこに流入する河川流域全体の森林や湿地から栄養塩や微量元素の供給を受けているからだ。さらに、流域における森林の存在は、河川の水量や水温を安定化させ、過剰な土砂流出を防ぐ（白岩, 2011）。このような視点から、今回のプロジェクトでは、山と海（特に浜）、そして両者の間にある川とのつながりを強調した。

山・川・海のつながりを含めた環境に関する知恵と知恵（物事を判断・処理



口絵4 岩手県宮古市の範囲と閉伊川水系、および本書で言及されている宮古市内の主な地名

する能力)、工夫(技術)は、「在来環境知」(local environmental knowledge)以下、在来知)と呼ばれる(本書第1・2・14章参照)。在来知は、人間を含む生物と環境との関わりについての理解だけでなく、それにもとづいた技術や実践と、その背後にある世界観を含む(Berkes, 1993)。歴史的にみると、在来知は、各地において、宗教・儀礼や遊びを含めた日々の習慣と一体となって継承され、形を変えながら進化し続けてきた。

在来知に加えて、今回のプロジェクトでは、レジリエンス(弾力性・回復力)と環境教育という、あわせて三つの概念を、主要な研究テーマとして設定した。レジリエンスとは、天災や人災に対するコミュニティの弾力性や、災害などから回復する力を指す(本書第1章参照)。今回の私たちの研究では、在来知と生態系・地域社会のレジリエンスとの関係、およびその歴史の変遷について、聞き取り調査と定量データの両者をもとに評価し、学際的な視点から、その可能性を検討した。これらの検討には、伝統的な生業活動とそれに伴う過去の社会の研究だけでなく、東日本大震災後の地域住民の行動の多様性、特に個人のイニシアティブや社会ネットワークの重要性と、今後の展望も含まれる。

さらに、研究の成果を地元の方々々と共有し、その意義を検討する場として、研究対象とした地域において、住民との協働による環境教育ワークショップを複数回にわたって開催した。こうした試みを通じて、地域社会の人々をはじめとするステークホルダーとともにつくる新しい環境教育のあり方を探った。

なお、このプロジェクトは、総合地球環境学研究所(地球研)のフルリサーチ・プロジェクト「地域に根ざした小規模経済活動と長期的持続可能性—歴史生態学からのアプローチ—」(研究番号14200084;羽生, 2016参照)、および人間文化研究機構の広領域連携型基幹研究プロジェクト「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」(特に、地球研が担当した「災害にレジリエントな環境保全型地域社会の創生」ユニット)と連携した。

2. 研究対象地域

プロジェクトの副題に示されている通り、私たちが主な研究対象として選んだ流域は、岩手県宮古市内を流れる閉伊川流域だ。これに加えて、比較研究として、岩手県二戸市浄法寺地区、および福島県内での聞き取り調査も行った。

閉伊川は、北上山地の中央部にあたる区界高原(旧川井村)の岩神山と兜明神嶽付近を源流として、北上山地内を西から東へと流れ、宮古湾へと注ぐ。

源流地点の標高は1000 mを超える。上流から中流域までは、川のすぐ近くまで山が迫り、平坦な耕地はきわめて少ない。一方、河口に位置する宮古湾とその付近の海岸沿いでは、漁業が盛んだ。閉伊川の支流には、夏屋川、小国川、刈屋川、長沢川、山口川などがある(口絵4参照)。

閉伊川は全長75.7 kmを測り、そのすべてが現宮古市の中におさまっている。しかし、現宮古市は、いわゆる平成の大合併以前は、旧宮古市、旧田老町、旧新里村、旧川井村に分かれていた。さらに、これら四つの大合併以前の旧行政区も、明治以降のたび重なる町村合併の結果として生まれたものだ。したがって、それぞれの旧行政区内でも各集落のアイデンティティは明確であり、文化や生業の特徴にも違いがみられる。

3. 研究地域別の活動と本書の構成

今回のプロジェクトの研究は、メンバー構成上は、在来知研究グループ、レジリエンス研究グループ、環境教育研究グループの3つのグループに分かれている。しかし、実際のフィールド調査を行うに当たっては、閉伊川流域を担当するメンバーは、ハマ班(閉伊川河口〜海浜部)、カワ班(閉伊川下流域〜中流域)、ヤマ班(閉伊川中流域〜上流域)に分かれ、これに比較研究の浄法寺班、福島班を加えた計5つの地域班が、3つの研究グループのテーマを横断する形で調査研究を進めた。各班の研究成果は、本書の第2部(閉伊川地域での成果)と第3部(比較研究の成果)に所収されている。

ハマ班：ハマ班では、閉伊川の河口域を含む宮古湾沿岸の地域社会に存在していた(あるいは現在まで存在している)在来知について、聞き取り調査と参与観察を行い、その成果を「磯鶏・藤原“むかし須賀”記憶の絵解き地図」として可視化した。さらに、このような調査を行なう過程を地域の人々のあいだで共有し、環境ガバナンスへの関心を高め、担い手を育む「地図・空中写真を用いた在来知の参加型聞き取り調査手法」を開発した。これらの作業を通じて、このような手法が、環境と地域のレジリエンスを維持・生成する上で持つ可能性を検討した(第4章)。

カワ班：カワ班では、環境教育を中心とした地域との協働にもとづいて、流域から河口域・海域を含む閉伊川流域の内発的發展を可能とし、最終的には沿岸被災地の内発的復興につなげることを目指した。今回の研究では、従来から継続していた「閉伊川サクラマヌ MANABI プロジェクト」を發展させるこ

とにより、在来知研究の成果を生かした環境教育の開発・実践・評価を行った。同時に、宮古市箱石を中心とする閉伊川中流域地区で在来知に関する聞き取り調査を行い、その成果を環境教育に生かした(第5章)。

ヤマ班：ヤマ班では、閉伊川上流域～中流域、特に旧川井村を中心とした北上山地で聞き取り調査を行い、その成果をもとに、閉伊川上流域と下流域の二ヶ所で、地域の在来知と生物多様性に関する写真展・交流会を開催した。このような研究を通じて、近代から現代にいたる歴史的变化の中で、食と生業の多様性、食物の保存・加工に関する在来知と社会ネットワークが、この地域におけるレジリエンスの重層性と柔軟性の基盤をなしていることを明らかにした(第6章)。さらに、これらの調査と平行して、北上山地の焼畑による土地利用が、植物の栄養塩類の物質循環という観点からの程度持続可能であったかを検討するために、現地の土壌と樹木の調査を行った(第7章)。

福島班：閉伊川流域を含む東北地方太平洋岸と隣接する山間地域は、2011年の東日本大震災時に、地震、津波、福島第一原子力発電所(原発)事故という三重の災害によって、きわめて大きな被害を被った。福島班では、原発事故の被害が特に深刻な福島県内での事例を通じて、県内の小規模な農業における在来知が、災害への対処に果たした役割を検討した。調査を始めた当初は、原発事故による被害があまりにも大きいため、在来知が有効なレベルを超えているのではないかと、という予測があった。しかし、聞き取り調査の結果では、在来知にもとづいた食と生業の多様性の維持とネットワークが、事故被災後の活動の原動力となり、さまざまな試みが始められていることがわかった(第8章)。

浄法寺班：岩手県二戸市浄法寺地区(旧浄法寺町)は、閉伊川流域と同じく岩手県北部にあり、奥羽山脈の太平洋側の安比川(馬淵川の支流)流域に位置する。ヒエ・ムギ・マメを基本とする二年三毛作と畜産や林業の重要性という点では、ヤマ班が扱った旧川井村地区と多くの共通点を持つ。

浄法寺地区では、近世初期から生漆の生産が盛んだった。戦後、プラスチック製食器の普及と中国産の漆輸入により、漆の需要は激減し価格も下落したが、近年、国産の漆が見直されたことにより、生漆の需要が高まっている。浄法寺班では、この地区における漆掻き職人への聞き取りと産地直売所での調査を行った。聞き取り調査の結果、昭和初期から現代にいたる植生、農業や生漆の生産を含む生業と、暮らしの変化の一端をうかがうことができた。成果の考察では、地域に根ざした小規模経済活動の重要性と、漆を使った新たなビジネス

の可能性について検討し、閉伊川流域との比較を行った(第9章)。

以上の第2部と第3部を含めて、本書は4部構成とした。第2部(ハマ班、カワ班、ヤマ班の成果)に先立つ第1部では、在来知・レジリエンス・環境教育の関係について、ヤマ班統括の羽生、ハマ班統括の福永、カワ班統括の佐々木、の3名が、それぞれの理論的基盤について、実例を交えながら説明した(第1～3章)。また、比較研究を取った第3部の最終章には、福島と浄法寺における調査成果とともに、岩手県下閉伊郡岩泉町安家で30年以上にわたり人類学的な研究を続けている岡恵介さんからの寄稿をいただいた(第10章)。第4部では、宮古市在住の橋本久夫さんと水木高志さんが、地元の視点から稿を寄せてくださった(第11・12章)。さらに、長年、人類学における学際的な統合と比較文化的な研究の重要性を主張してきた小山修三さんと杉山祐子さんのお二人から、コメントをいただいた(第13・14章)。

4. まとめ

レジリエンスの議論における在来知の再評価は、経済成長を重視する社会から長期的な持続可能性を重視する社会へ、という発想の転換につながる。特に2011年の東日本大震災後は、日本の各地で、環境負荷の低い、地域に根ざした小規模な生産活動の有効性を再評価する動きが目立っている。このような時代の変化は、近年における縮小社会論(縮小社会研究会, 2018)や、田園回帰1%戦略論(藤山, 2015)への注目に現れている。これにともない、各集落における高齢者の割合の増加をもって地方消滅を予測してきた、いわゆる限界集落論の見直し(山下, 2012など)も提唱されている。本書が、このようなパラダイム・シフトの一助となることを願う。

末筆ながら、上記の水木さん、橋本さんをはじめとするとたくさんの地元の方々、特に私たちのインタビューに丁寧に丁寧に答えてくださった方々のご協力、ご厚意と熱意に、深く感謝の意を表す。

引用文献

- 縮小社会研究会 (2018) ホームページ. <http://shukusho.org/> (2018年1月6日アクセス).
白岩孝行 (2011) 『魚附林の地球環境学—観潮・オホーツク海を育むアムール川』地球研叢書. 昭和堂.
羽生淳子 (2016) 「食の多様性と気候変動」『考古学研究』63(2): 38-50.
藤山博 (2015) 『田園回帰1%戦略—地元の人と仕事をとり戻す—』農山漁村文化協会.

第1部 理論的・方法的

第1章 在来知・科学 —景観と文化の—

1. 豊作があれば不作もある
2. 在来知—西洋科学とは異
3. レジリエンスの理論から
4. 歴史生態学からみた在来
—環境と人間の相互作用
5. おわりに 11

第2章 在来知ネットワーク

1. 在来知はなぜ重要なのか
2. 在来知とは何か—重なる—
3. ネットワークの中の在来知
4. 「在来」であることを獲得

第3章 在来知と環境教育

1. はじめに 33
2. 環境教育のこれまでの経緯
 - 2.1 人間環境宣言における
 - 2.2 ベオグラード憲章